

ラビ「J」

2012年4月15日

アシェル・イントレーター

最近、海外にある(訳注:イスラエル以外の「離散地」のこと)メシアニックCongregation(会衆)のリーダーたちを「ラビ」と呼ぶべきかどうかという議論が発生しています。この件について賛成派と反対派で意見が分かれています。興味深いことに、イスラエルにおけるこれらリーダーたちで「ラビ」と呼ばれている人はいません。イスラエルでは、一般的にラビは、権威をもった支配的な地位を表わすため、特に今の時代においては、Congregationのリーダーたちを「ラビ」と呼ぶことは適切ではないのです。

似たような議論で、使徒パウロ(サウロ)をラビと呼ぶべきか否かというものがあります。まず、新約聖書の中には彼が「ラビ」と呼ばれている箇所はありません。しかし一方では、彼は明確にラビ的な地位をもち、大祭司からの委任状をもち(使徒の働き 9章2節、22章5節)、正統派ユダヤ教徒のリーダーの一人であり(ガラテア 1章14節)、最も過激な宗派の一つの一員(使徒の働き 26章5節)であり、そしてエルサレムイエシバ(タルムードの学校)でガマリエルの薫陶を受けた人物として描かれています(使徒の働き 22章3節)。

関連する議題のもう一つは、イエシュア(イエス)をラビと呼ぶべきか否かという点です。福音書の現代ヘブライ語版は、イエシュアについて50回も「ラビ」と呼んでいます。その50回のうち、13回はギリシャ語の「rabbi」から(おもにヨハネの福音書に)、36回は「*didaskalos*」(よく「師」や「教師」と訳されているもの)から、そして1回は「*kathegetis*」からの訳語が使用されています。

{メシア(キリスト)、神の子(マタイ 16章16節)や主(ローマ 10章9節)といった権威をとともう呼称とは対照的ですが、}これらの参照のうち、どれをとっても、イエシュアを「ラビ」と呼ばせるよう示唆しているものは全くない一方、それらすべての参照は、ユダヤ人の観衆にとって、その呼称が使われることが適切である場合、また異邦人の観衆にとって、新しい契約の歴史的・文化的意味合いを強調する場合において、その呼称を使うことの有効性を証明しているのです。

マタイ23章8節---しかし、あなたがたは先生 (*rabbi*) と呼ばれてはいけません。あなたがたの教師 (*didaskalos*)、メシア (*christos*) はただひとりしかなく、あなたがたはみな兄弟だからです。

この聖句は「ラビ」という呼称がメシアニックのリーダーたちにとって如何にふさわしくないものであることを示しているほか、イエシュア自身に対しては、どれほどふさわしいものなのかが示されています。異邦人の国々においてはイエシュアが「ラビ」と呼ばれる必要性はありませんが、この呼称を用

いることにより、文化的背景を示すことが正当化されます。イエシュアを「ラビ J」と呼んでも良いのではないのでしょうか。

いまユダヤ人学術界やラビ界で、ユダヤの歴史的な意味合いにおけるイエシュアについての研究が、新たに注目を集めています。CNN の記事「ユダヤ人としてのイエスを再認識するユダヤ人 = *Jews Reclaim Jesus as One of their Own*」では、最近、著名なユダヤ人著者により出版された4つの書籍を紹介しています。

- ユダヤ的注解付き新約聖書 (The Jewish Annotated New Testament) 著者: Amy-Jill Levine
- コーシェル(ユダヤ教戒律)を守ったイエス (Kosher Jesus) 著者: Rabbi Shmuel Boteach
- わたしのイエス(に關しての)1年 (My Jesus Year) 著者: Binyamin Cohen
- ユダヤ的福音: ユダヤ人であるキリストの人生 (The Jewish Gospels: The Story of the Jewish Christ) 著者: Daniel Boyarin

これらの著者はイエシュアを救い主として信じてはおらず、時にはメシアニック信仰に対し非常に敵対感をもってはいますが、新約聖書のユダヤ的背景に対する興味と研究をおこなっていることは、ひとつの良い兆候なのではないのでしょうか。記事の全文は[こちら](#)をクリックして下さい。(英文)

復活と過ぎ越し

今週、アラブ諸国にある東方諸教会はイエシュアの復活をお祝いしています。パレスチナの福音派は大勢のメシアニックジューを迎えて、東エルサレムにある「園の墓」の空の墓の前で礼拝を行ないました。メシアニックジューはイエシュアの死と復活を、過ぎ越しの祭りの一部としてお祝いします。わたしたちは主の十字架について過ぎ越しの直前の安息日に教え、主の復活については直後の安息日に教えます。

過ぎ越しとイエシュアの復活の関係はとても深いのです。両方の出来事において、リフノット・ボケル(夜明け前という意味)という表現が見受けられます。

出エジプト記 14 章 27 節

モーセが手を海の上に差し伸べたとき、リフノット・ボケルに、海がもとの状態に戻った。エジプト人は水が迫って来るので逃げたが、

ヨハネ 20 章 1 節

さて、週の初めの日に、ミグダル(マグダラ)のミリヤム(マリヤ)は、リフノット・ボケルのまだ暗いう

ちに墓に來た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。

イスラエルの民は過ぎ越しの晩にエジプトを立て、その行程(スコテからエタムそしてピ・ハロテ---出エジプト記 13 章 20 節、14 章 2 節)のうち宿營で2泊し、その2日目の夜の間中、神は海を開かれました。3日目の朝彼らは紅海を渡り対岸に着いたのです。

御使いなる YHVH が、彼らとともにおられ、横断していくなかで導かれたのです。イスラエルの民が海を渡ったのは、大規模な集団洗礼を象徴していました(第 1 コリント 10 章 1~2 節)。そして海から歩み出たことは彼らにとっての復活を象徴しているのです。私たちはこの雲と火柱の中にいた、御使いなる YHVHこそが、この世に生まれる前の形のイエシュア自身であることを信じています。

イエシュアが十字架にかけられた後、その亡骸は墓に葬られました。彼の魂と霊は地獄に落ちましたが、3日目の夜明け前に地獄の力を打ち破り自らの肉体に甦ったのです。彼が墓から歩み出たその時間は、それより千年以上前に彼が紅海から歩み出たその瞬間と同じ日の同じ時間だったのです。

この二つの出来事は、同じ要領で、同じ日の同じ時間に起こったのです、それは神様の目にはこれらの事が、本質的に関連しているからです。この二つは一体化されています。そしてイエシュアはこの両方の出来事の中心人物なのです。ミリアム(マリア)がそこにおり、モーセもいましたが、復活と出エジプトは神の御子であり、YHVH の御使いであるイエシュアによって実現されたのです。

伝統的な過ぎ越しの食事(セデル)における最も重要な要素の一つは、どんな世代においても、私たちは自分たち自身が今エジプトから出てきたかのように捉えるようにする事です。同じように新約聖書では、私たちすべては、自分たちの事をまるで私たち自身がイエシュアとともに十字架に掛けられ、復活したかのように捉えるようにされているのです。イスラエルの民が御使いなるエホバとともに経験した歴史上の出エジプトは、メシア・イエシュアを通してすべての神の子供たちが経験する霊的な出エジプトの雛形なのです。

この神様の永遠の御計画と大局からくる出エジプト-復活についての預言的構図を観ると、過去、現在、未来が重なり、ひとつとなるのです。